群教セ	G01 － 03
	平28.261集
	国語－中

根拠を明確にして文学作品を読む力の育成

――叙述や表現の特徴に着目する鑑賞シートの活用を通して――

特別研修員　岡野　典子

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

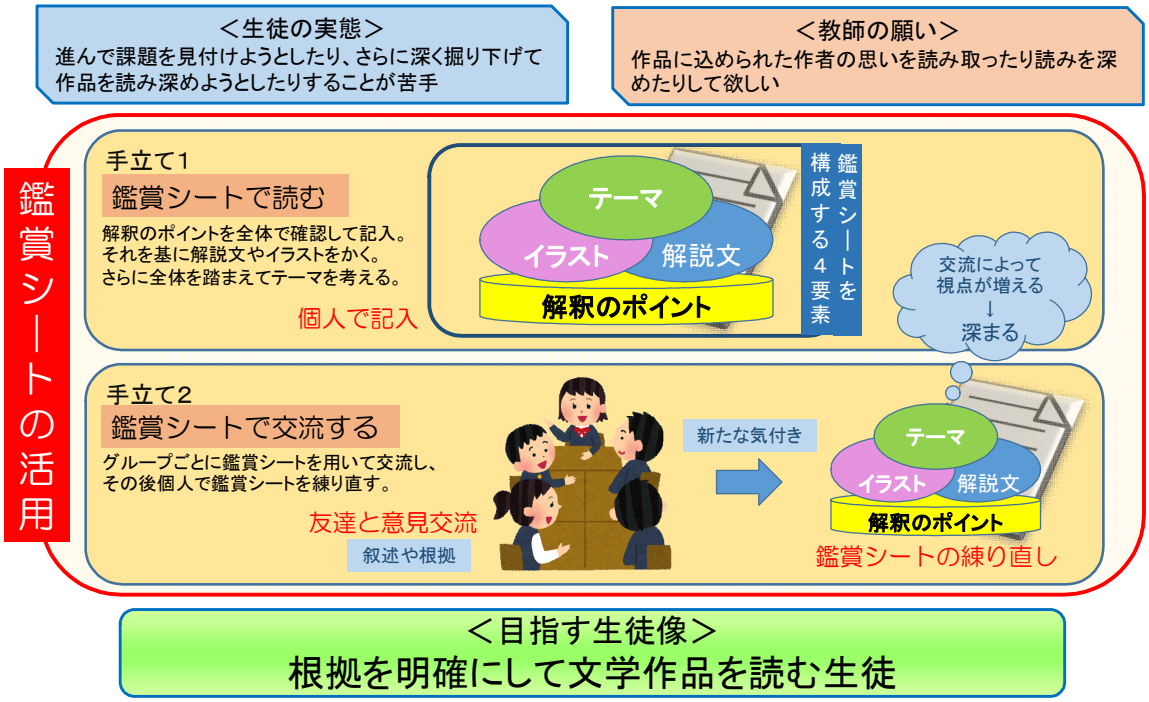
第２期群馬県教育振興基本計画では七つの基本施策の一つとして確かな学力の育成が挙げられている。その中で国語科は全ての学習の基礎として、担う役割は大きい。また、はばたく群馬の指導プランでは国語科の課題として「文章の特徴や表現の仕方について考えること」を挙げている。

本校の生徒は授業に前向きで、与えられた課題に対して真面目に取り組む生徒が多い。しかし一方で、自ら進んで課題を見付けたり、更に深く掘り下げて問題追究をし、そこから自分の考えをまとめたりすることを苦手としている。国語科の授業においても、事実の確認や時間の経過など、文章に表された内容については読み取ることができるものの、そこから一歩踏み込んで作品に込められた作者の思いを読み深めようとする力が十分高まっていない。生徒が作品を主体的に読む深めることができない背景には、読み方が分からない、何を読み取ったら良いか分からないという読む力の未熟さがあると考える。そこで、物語や詩、短歌などの文学的作品において、叙述や表現の特徴に着目して読み、読み取った内容を鑑賞の要素ごとにシートにまとめ、さらにそのシートを用いて交流する学習活動を充実させていくことで、作品理解を深めることができるようになるのではないかと考えた。

以上の点から、叙述や表現の特徴に着目した鑑賞シートの活用を通して、根拠を明確にして文学作品を読む力が育成できると考え、上記の研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

生徒が叙述や表現の特徴に着目し、根拠を明確にして作品を読むための方法として、鑑賞の４要素を書き込めるようにした鑑賞シートの活用を行う。

手立て１ 鑑賞シートに叙述や表現の特徴に着目しながら解説文などを書き込ませる。 手立て２ 書き込んだ鑑賞シートを用いて、自分が着目した叙述や表現を根拠として意見交流会を行う。

手立て１の鑑賞シートは以下の４要素を書き込めるように構成した。

a　解釈のポイント・・・作品中の重要語句や表現技法などを確認したもの
b　解説文　　・・・読んだ作品の内容を、言葉で説明したもの
c　イラスト　　・・・読んだ作品の内容を、イラストで表現したもの
d　テーマ　　・・・主題を言い表した短い言葉

記入の手順としてまず、解釈のポイントをシート上段に書き込むようにする。クラス全体で作品中の重要語句や扱われている表現技法を確認して記入させておくことで、生徒が解釈をする際に授業で学んだことを常に意識し、活用できるようにした。次に、解説文を書くことを行う。解説文を書く際は、詩中の叙述や表現技法に沿って情景や心情を説明するよう促す。生徒は作品そのものだけでなく、資料集などからも作者の生き方や時代背景などを知り、それらを踏まえて解説文を書いていく。また、読み取った内容を踏まえてイラストを描くことも行う。これは、情景の奥行きや作者と対象物との距離、色彩などを視覚化することに適している。さらに、作品を通して作者が何を伝えたかったのかに迫るためにテーマを考える。テーマを考えることで、生徒はもう一度作品に戻り叙述や表現を根拠として作者の思いを酌み取ろうとすることができる。これら四つの要素を網羅することで生徒は作品の読みに迫ることができるのである。

手立て２は、書き込んだ鑑賞シートに沿って交流会を行うというものである。３・４名のグループを編成し、自分が着目した叙述や表現を根拠として意見の交流を行う。その際、違いに着目するよう促し、何を根拠としてそのように考えたかを交流させる。生徒は同じ作品でも様々な解釈があることを交流によって気付くことができるようになる。さらに、交流を通して得た新たな気付きを加えて、鑑賞シートを練り直す活動を行う。もう一度自己の鑑賞シートと向き合うことで、より広い視野から作品を見詰め、作品理解を深めることができるようになる。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　作品を読んで鑑賞シートに書き込む活動は、生徒が作品中の叙述や表現技法、作者の生き方や時代背景など様々な角度から根拠を持って作品を捉え、解釈しようとする点で有効であった。鑑賞シートを構成する４要素(解釈のポイント･解説文･イラスト･テーマ)を記入していくことで、生徒は作者が作品を通して伝えたかったことに迫ることができていた。

○　鑑賞シート交流会において、自分が調べたり解釈したりしたことを基にグループ内で意見を交流し合う際、互いの違いに着目させることで交流すべき内容が明確になり、活発な話合いをすることができた。鑑賞シート交流会を通して、今まで気付かなかった新しい読みの発見があったとほぼ全員の生徒が答えていた。

２　課題

○　文学作品を扱う上で、個人の自由な解釈に委ねられる部分と揺るがない事実として押さえておかなければならない部分の線引きが困難な場面があった。生徒の自由な発想による解釈を保障しつつ、理解の基となる基本的な事項の確認や抑えを適切に行っていくことが大切である。

○　交流した内容や交流の結果が練り直した表現にどのように反映されたかが分かるように、記録のさせ方や鑑賞シートの工夫を行っていくことが更なる課題である。

実践例

１　単元名　　「鑑賞シートを使って交流会をしよう」
　　教材名　　「漢詩の世界」三省堂（第２学年・２学期）

２　本単元（題材）について

本題材は第１学年の「『故事成語』を使って書こう」に続く漢文の教材であり、書き下し文を中心に４編の漢詩を取り上げる。漢詩には声に出して読んで心地良い独特のリズムがあり、その意味では第２学年で学習した「短歌の世界」やこれから学習する「大阿蘇」などの韻文教材とも関連があると言える。限られた文字数の中で読み手に情景や思いを伝える韻文において、筆者が敢えて割愛した部分を分からないと捉えるか、読者の想像に委ねられていて深い、おもしろいと捉えるかは作品解釈における大きな分かれ目となるだろう。さらに、それぞれの漢詩が作られた時代や場所を考えると、生徒にとって全く懸け離れたものと受け取られがちである。そこで、その物理的・意識的空白を埋め、作者の思いに寄り添って詩の意味を捉えることができるように、叙述や表現の特徴に着目する鑑賞シートを活用する。

鑑賞シートとは、鑑賞の４要素（解釈のポイント・解説文・イラスト・テーマ）を１枚にまとめられるようにしたワークシートである。鑑賞シートへの書き込みを通して作品の情景や時代背景などに加え、詩から読み取れる作者の心情などに触れさせたい。さらに、単元の終末には生徒それぞれが書き込んだ鑑賞シートを持ち寄って交流会を行う。複数の鑑賞シートを比較することで自分では気付かなかった視点に触れることができたり、見落としていた表現技法の効果に気付くことができたりすると思われる。叙述や表現の特徴に着目した鑑賞シートへの書き込みや交流を通して主体的に作品と向かい合い、さらには古人の思いに触れることができるであろう。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	・漢詩特有の言葉遣いや表現方法などの特徴を理解して、漢詩の世界を読み味わう。 ・漢詩に描かれた情景から作者の心情を想像し、古人のものの見方や考え方に触れる。	
評価規準	関心・意欲・態度	漢詩について自分なりに根拠を持って解釈したことを、交流を通して深めようとしている。
	読む能力	叙述や表現の特徴に着目して鑑賞シートに沿って考え、作品と向かい合いながら記入することで、漢詩の情景や作者の心情を読み取っている。
	言語についての知識・理解・技能	漢詩に描かれた情景から作者の心情を想像し、古人のものの見方や考え方に現代人との共通点を見いだしている。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第１時	・鑑賞シート交流会について知り、「春暁」を読んで鑑賞シートへテーマを書き込む。
課題追究	第２～４時	・「春望」を読んで解説文などを鑑賞シートへ書き込む。 ・「絶句」を読んでイラストなどを鑑賞シートへ描き込む。 ・「黄鶴楼にて…」を読んで鑑賞の４要素を鑑賞シートへ書き込む。
まとめ	第５時	・前時の鑑賞シートを基に交流し、交流を基に鑑賞シートを練り直す。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全５時間計画の第５時に当たる。生徒は単元の終末に鑑賞シート交流会をすることを目指して漢詩の読み取りを行ってきている。作品に込められた作者の思いを、叙述や表現の特徴を根拠として読み取ったり、深めたりするための方法として以下の二つの手立てを考えた。

手立て１
・重要語句や表現技法などの確認、読んだ漢詩の内容を、言葉による説明、イラストによる表現、主題を言い表した短い言葉が一体となった鑑賞シートにまとめる活動を取り入れる。
・作者が詩を通して伝えたかったことを明らかにするために、叙述や表現技法に着目させて解説文やイラストを書き込ませた後、主題についてまとめさせる。

手立て２

・鑑賞シートをグループで交流させる。
・自分が着目した叙述や表現を根拠とできるよう、起承転結、対句、対比、倒置、時代背景等教材に合わせた視点を示し、違いに着目させながら意見交流を行わせる。
・交流したことを基に、読み取ったことや自分の考えを修正する。

4　授業の実際

本時は、前時に記入した図１のような鑑賞シートを用いてグループで意見交流することを主な学習活動として設定した。

＜前時の授業＞
生徒は前時に鑑賞シートへの書き込みを通して「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の読み取りと自分なりの解釈を行っている。まず、解釈のポイントとしてここでは主に重要語句や構成法（起承転結）、対比や倒置など表現技法の確認をクラス全体で行った。次に生徒は解釈のポイントで確認したことを基に、漢詩の内容を言葉で説明する解説文を書いた。この際、ただの現代語訳にとどまらず、自分で資料集などを用いて作者の生き方や作品ができた時代背景などについて調べ、詩の説明の中に書き加えさせた。このことにより、作者がなぜこの詩を詠んだのか、どのような思いで詠んだのかに触れることができた。次に作品のイメージを視覚化するイラストを描いた。教師が場面を指定することはしなかったが、生徒は孟浩然の乗った舟や見送る作者を中心に、詩の前半の内容を絡めて描いていた。イラストを描く際、詩から読み取れる情景を表すこと、作者がどこにいるのか、舟はどこにいるのかなど空間的な要素を表すことを条件とした。最後に主題を言い表した短い言葉であるテーマを書いた。解釈のポイントを基に、解説文やイラストで作品を読み取ったことを踏まえて自分なりの「黄鶴楼にて…」の主題を考えた。

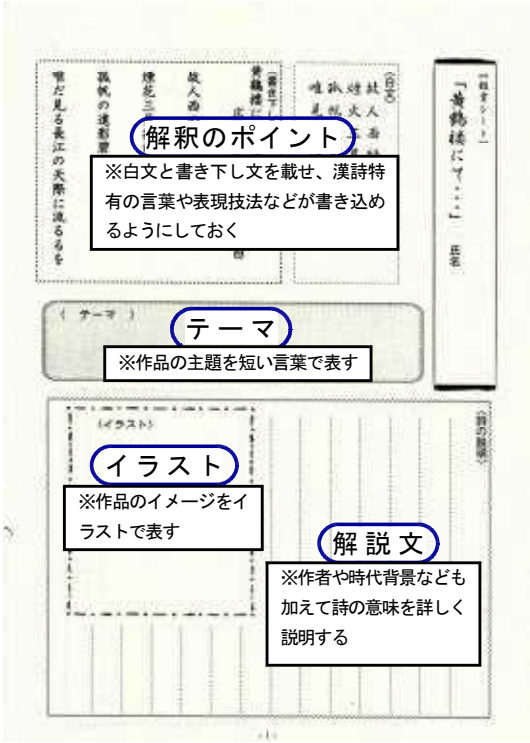


図１　鑑賞シートの実際

前時に書き込んだ鑑賞シートを基にクラスを３・４人ずつのグループに分け、意見交流をするグループを編成した。グループのメンバー構成は考えの違いが見て取りやすい者同士を組ませ、その後の交流がしやすいように配慮した。

グループでの意見交流の際は、漢詩を読み味わう時のポイントを交流の視点として示した。さらに、話のきっかけとしてそれぞれの解釈の違いに注目するように伝え、なぜそのように考えたかを詩の言葉や現代語訳を根拠として理由を述べるように伝えた。そうすることで、生徒は自分の解釈を根拠を持って説明

図２　シートを基に交流している様子

Ｓ１：僕は詩のテーマを「春の景色と寂しい友との別れ」にしたよ。
Ｓ２：どうして「春の景色」という言葉を入れたの？
Ｓ１：承句に「花霞」という言葉があって、春のきれいな景色を言っているから入れたんだ。
Ｓ３：じゃあ、「寂しい友との別れ」の「寂しい」はどうして？
Ｓ１：詩の中に「孤帆」という言葉があって、これは孤独の孤だから寂しいだと思ったんだ。

※生徒は、鑑賞シートの中の詩の言葉や自分で書いた解説文を基にして友達に説明する。

したり、友達との相違点を明らかにしたりしながら互いの鑑賞シートを比較し合うことができた。

交流後の鑑賞シートを練り直す活動では、交流によって気付いた点を取り入れて鑑賞シートの表現の見直しを行った。Ａ子の読み取った交流前のテーマは「友人との別れ」であったが、交流の中で漢詩の構成による表現の効果についての考えに影響を受け、最終的には「華やかな景色と友との別れ」という考えに至った（図３）。また、Ｂ男の読み取った交流前のテーマは「友人とのつらい別れ」であったが、交流の中で「旅立つ友人を見送る作者がどのような気持ちでこの詩を詠んだか」という友達の考えに触れることによって交流後は「頑張る二人を迎える春」という考えに変容した。これらは、交流することによって自分では気付かなかった作品の解釈に気付けたり、見落としていた表現技法を理解したりすることができた結果である。それらを取り入れて鑑賞シートを練り直すことにより、漢詩を複数の視点から根拠を持って読み取り、自分なりの考えを持つことができるようになったと考える。

図３　Ａ子がシートを練り直している場面

授業後の生徒の振り返りでは、「ほかの人の意見を取り入れることによって、自分では考えてもいなかった情景が浮かんできて（交流後の鑑賞シートは）読みが深まった」や、「グループになって交流することによって、新しいことを発見することができた。内容を深く考えれば考える程、興味深い詩だった」といった鑑賞シートを活用することの良さや効果を実感する感想が多く見られた。このことからも生徒は鑑賞シートへの書き込みや交流を通して、自分なりの根拠を持って漢詩を解釈していたと言える。

５　考察

鑑賞シートへの書き込みをする活動では、「解釈のポイント」をクラス全体で確認し、それに沿って詩の内容を解説させたり詩のテーマを考えさせたりしたことで、生徒は常に詩中の言葉や表現技法を基に作品について考えることができた。「解説文」では作者や時代背景などの資料を用いて調べたことを取り入れ、「イラスト」では文章では表しづらい視覚的なイメージを表現し、「テーマ」では作品の主題を捉えるというように、四つの要素からアプローチすることにより、作品に込められた作者の思いをより深く読み取ることができた。

また、このようにして書き込まれた鑑賞シートを用いて鑑賞シート交流会を行う活動では、自分が書き込んだ鑑賞シートを基に、相違点を比べることで友達との解釈の違いに気付くことができた。漢詩中の同じ言葉でも人によってイメージが異なったり、似たような解釈でも根拠とするものが違ったりする事例が多く見られた。交流することによって、読み手である生徒自身の生活経験や読書経験の違いを埋めることに役立ったり、作者が詩の中に織り交ぜた巧みな技法に気付くきっかけになったりした。さらに、交流後に交流の内容を踏まえて鑑賞シートを練り直す活動を行ったことは、前時に書いたものと比べて新たな情報が付け加わったり今までなかった読みが追加されたりし、より広い視野から作品を見詰め、作品理解を深めることに有効であった。

一方、生徒は鑑賞シートを練り直す際に自分なりの理由を持って語句を書き換えたり新たな情報を取り入れたりはしているが、生徒が何を理由に練り直したかを見取りづらいのが難点であった。今後は、生徒が交流後に考えを変更したり付け加えたりした根拠や理由を、教師が把握する手立てを考える必要がある。授業の振り返りだけでは生徒がどのような考えを取捨選択し最終的な結論に至ったのかを把握することが難しかったので、付箋紙やメモ活用、ワークシートの工夫などを考え、継続して実践に取り組みたい。

６　資料